

昼間のうちに、左知子は中原町のヤマギシタクロウの家を突き止めた。

表札には山岸喜代次とあったが、黄色の、同型のバイクが庭先にとめてあったのでここがあつた。若い男の家に違いないと思つた。

車のナンバーも視認した。

二階建てだったが小さな家だった。

だが敷地は六十坪余もあつて、庭の隅に離れの別棟があつた。あいにく男の姿は見かけなかつたが、左知子は、新しい興味が湧いた。

あとは、ヤマギシタクロウと何とか会うきっかけを作ればいいのだった。

それから、ヤマギシタクロウの素姓を左知子は洗うことにした。

高校時代の友人の家に片っ端から電話した。

前に中原町に住んでいた女友達が、その男の素姓を少しだけ語ってくれた。

「左知子、なに、その男と結婚でもするの？」

「まさか。わたしのことじゃないのよ。ややこしいことは訊かないで」

「そうよね。うちの弟と同じ齡だもの、三つ下、でもこの頃の若い男って頼りないもんね。年上の女の人がいいっていう男の子けっこう多いのよ。わたしの会社でもそういうの流行ってるのよね」

高校卒業以来の電話なので、相手は関係のないことばかりをしゃべつた。

「それでカレはもう大学生？」

「まだ浪人中、国立大ばかり狙ってるものだから今年で二浪、だいぶめげてるみたいよ。前はうちの前のほら、新河岸川んところで、よく弟と二人、トランペット吹いていたのよね。そうそ、今週の日曜日、川越の市民公会堂で演奏会があるのよね。うちの弟はトランペット止めちゃったんだけどあの人まだやってるの。それで切符送って来たのよ」

「あなた、美里が赤ちゃん生んだの知ってる？」

「女の子なのよね。すっごく可愛い。眼がくるくるっとしててさ。駅前のマインのエスカレーターのところであつたのよ。ほっぺたがね、ましゅまるみたいで、それで、わたし可愛いから頬っぺつついちゃったあ」

「美里って赤ちゃん見せたがるの。どうってことないのにね」

「……ね、ね、山岸さんもちつてのはね、お父さんが一年ほど前に首を吊って死んだのよ」

「首を吊って？」

「そうなの。物置小屋でね。ずいぶん借金していたんだって。その上に人に貸していた家が燃えちやったりして、踏んだりけったりだったのよ。丁度去年の今頃のはなし」

「へえー、知らなかった」

「ね、久し振りだから今度会わない。わたしね、今、彼のことで悩んでるの。家の人には相談出来ないことなのよ」

「そのうち電話したげる。このところちよつと忙しいんだ」

「ね、どうして、山岸タクロウのこと気になるの？」

「いいの、今度会った時に、ことの次第はゆっ

くり話してあげる」

あれこれ詮索されそうなので左知子は電話を切った。友達の名は北川洋子と言った。少しだったが山岸家の事情がわかった。

今週の日曜日、川越市民公会堂に行けば、山岸タクロウにも会うことが出来る。

この日は、生活保護の金が支払われる日なので左知子は六軒町の郵便局に行った。

表通りに出、自転車で札の辻まで行く。

蔵造り資料館からほど遠くない路地裏に、あめや横丁と名付けられた古びた街並があった。

江戸の昔からこのあたり一帯は関東随一の駄菓子生産地として知られた。

大正時代から昭和四十年頃まで、仲買人だけでも二百人以上、製造業者も八十軒近くあった。むぎ棒、さらし飴、黒玉、茶玉、かつぶしあめ、水晶玉：それに落雁（らくがん）などの和菓子類が作られていたのだが今は店は十一軒ほどしかない。

隣家の田尻義和の製造工場もこの一郭にある。梯吉は今日金のおりることを知っていて、「帰りにはつかのあめを買ってきてくれ」と、言った。

田尻に会うのが嫌なので札の辻に面した角の店で袋入りのはつか飴を買い求めた。

三角形をしており、白いはつか飴の中にはいくつか青や赤のきれいな色のついたものも入っていた。東京からでも来ているのか、学生とおぼしき三人連れの若い男たちが、あめや横丁にカメラを向けていた。

「こんな薄汚ない街のどこがいいのだろう」と、左知子はまたひねくれた考えを持った。

はつか飴を待っていた梯吉はすぐにその一つ

を口に入れた。

「なにか、こう、すーっとするようなことがあるといいのにな。はっかのようにな」

と、梯吉が上機嫌になり言った時、電話が鳴った。

「さつきからうるさくて仕様がな」

はっか飴を口に頼張った梯吉が吐き捨てるようにして言った。左知子が電話口に出る。

「ああ、いるのならいいよ」

相手は名乗らなかつたが、電話の主はわかつた。忙しそうに電話は切れた。

「しばらく来ないと思つたらまたあいつらか」

梯吉にも相手はわかつたようだった。

十分もたたぬうちに、玄関の扉が開き、二人の男たちが押し行つて来た。

「わかつているだろうけど、ここの家は法律上はもうあんたたちのもんじゃないんだよ。もうとつくに七百万円の借金の返済期限は切れている。この前来た時は、あと半月待ってくれってことだったけど、いつまで待っても金が返せないじゃ、もうこれ以上情をかけるわけにはいかんよ」

町の金融屋の男と、スナックの店を居抜きで貸した不動産屋の男であった。

「いくら来られても七百万円なんて金、払えるわけがありません」

「いくら居住権があるつたつて、裁判になればおたくの負けですよ」

「裁判にすればその間は立退かなくてすむんでしょ」

「返す気があるのかないのか。あんたそんな強気なこと言つていいのか」

「わたしは女ですからね。そんな言われ方するともう何にも言えなくなるんです。脅されてるって訴えましょうか」

「なんだって。これでもわたしは紳士的に振舞っているつもりだよ。考えてもみる。この家を売れば、何とか土地だけでも借金分ぐらいにはなる。残った金で、あんた方がアパート暮らしでもすれば、生活を建て直すことだって出来るじゃないか」

金融屋の男は背の低い、肩幅のがっちりした五十年配の男であった。

赤ら顔にまた朱が注いだ。

「あのね、借金ってものは放つとけばどんどん利子が嵩（かさ）むんだ。ちがうかね。今のうちにこの家を処分すればだね、少しだが、あんたのところにも金が残るんだ。これはお互いにいいことじゃないのかね」

玄関先は薄暗い。不動産屋の男はねっちりとした口調でしゃべった。

「ともかく八月末で、こうした話合いは打切らせて貰うよ。ああだこうだと、言い合っているはらちが明かないんだから」

「もう、力づくで追い出そうと言うんですか」  
「そっちの考え方次第だろ。あんたのところはこの家が借金の抵当に入ってるんだからまだいい方なんだよ。サラリーローンを借りてる連中なんて惨めなもんさ。ない袖は振れんのだから。ここはあんた、家があるだけ恵まれているんだよ。そうだろう」

「ともかく、立退く気はありませんから」

「ヤロウ、借金は借金なんだよ」

金融屋の男の赤ら顔に血が上る。

「なあ、芳枝さんだって、元はこの家の一人だ

ったんだろ」

不動産屋の男が言わずもがなの事を言った。

と、その時、男たちが視線を一点に集めた。左知子が後を見たら、そこに、梯吉の半ば禿げた頭があった。両肘ついてここまで、六畳間から這いずって来たらしい。

襖の陰に手が掛かっけていて、なおも、梯吉は前へと進もうと努力していた。

「お、おまえら……こ、このおれがよう……ふざけやがって」

畳の上に這いつくばったまま、梯吉は精一杯に怒りの声を発した。

肩で大きく息をしている。

左知子はただ眼を見張っていた。

父がここまで這って来ようとは思ってもいなかったことだった。寝たきりで、これまで身の回りのものだけにしか手を伸ばさなかつた。もちろん、脚を使う動作を見せたこともない。

「わたしら喧嘩をしに来たんじゃありませんからね。これはビジネスの話だ。感情的になられても困るよ」

場馴れしているのか金融屋の男は突き離れた言い方をした。

「なにを！おれがしゃんとしてたら、てめえらぶつとばしてやらあ……畜生め！」

やっとその場まで這いずって来たのだが、もうそこで梯吉は息を切らしていた。

何度か立ち上ろうとしたが無理だった。ただ、気持だけが殺気立っている。

「何と仰言られても奥さんから土地の登記書はお預りしてるんですから、こちらで処分はさせてもらふことになる」

「なにを！」

怒り心頭に発した梯吉が、よろよろと立上ろうとした。が、満身の力をふり絞ろうと努めたが到底無理だった。手足ばかりを梯吉はばたばださせていた。玄関の上り框（かまち）は畳二枚分程の板の間になっている。その固い板の上に、梯吉は前倒しに、もろに上体をぶつけた。

瞬間、片手で自分の全体重を支えようとしたが、支え切れずに激しく顔を打ちつけた。

「お、おめえら……」

まだわめき声をあげていた。

助け起そうとして左知子が上体を持ち上げたら、したたか鼻を打ちつけたとみえ、大量の鼻血が溢れ出て来た。

その血を見て梯吉は余計に怒り狂った。

体の自由が利かないのに、玄関先の二人になおも殴りかかろうとした。

「今日のところは帰ります。でもぎりぎり、あなたがこの家に住めるのは今月限りだと言うことを忘れて下さい」

どちらの男が捨台詞を残したのか、左知子は聞き分けてはいなかった。

「お父さん！もういいの、いいんだったら」

双つの拳を握り締め、なお怒りに体を震わせている父に、左知子は娘らしい声を掛けた。

「……左知子、わしは……頼むから、部屋へ連れて行ってくれ」

「お父さん……」。などと呼んだのはずいぶんと久しぶりのことだった。梯吉は左知子に甘えているような声を出した。

「な、あんなやつら、わしが元気なら手足をへし折ってやるところだ。あの不動産屋の男だって少しは知ってる仲だ。どいつもこいつも弱い者いじめをしやがって」

さつきは雄々しく立上ったのに、もう梯吉は自分から動こうとはしなかった。

「左知子、玄関に錠をかつちまえ。もう誰れも入れるんじやねえぞ……」

どこか均衡を欠いたことばで、こころなしか涙声になっていた。

「さあ、わたしに掴まって」

左知子は、梯吉の体を抱え取ろうとした。ただあお向けに転ったままだった。

「ああ、すまん」

とても弱気な声に聞えた。

小さな体で、左知子は父を抱き上げる。まるで駄々っ子のように手足をぶらんぶらんさせているのでなかなか体が持ち上らない。

敷きつ放しの床には戻りたくないと言っているかのようだった。

やっと梯吉も自分で起き上る姿勢を示したので上体が浮いた。足は引き擦られていて、上体だけを運ぶ無理な姿勢になった。

梯吉が部屋に辿り着く前に、左知子は重い体を投げ出していた。傷口の奥が刺し込むように痛み、左知子は梯吉の体が支え切れずに手を離れた。畳の上に投げ出された梯吉の体の上に左知子も折り重なる。「うっ」と呻きの声を左知子は上げていた。

倒れかかってきたわが娘の体を抱き取り、その時、梯吉もおいおいとへ声をあげて泣き出した。左知子が哀しさに耐えられず嗚咽の声をあげたと、梯吉は思ったのかも知れない。

「……なあ、左知子、わしはこの体だ。お前になんて迷惑掛けてる。ほんとにすまん。だがな、この体じゃあと死ぬよりほかないだろ。これは父ちゃんだって辛いことなんだよ……」



左知子はしっかりと父親に抱きとられていた。そつと梯吉の腕が左知子の背に回され、子供をあやすように動いた。左知子が顔を寄せた時、梯吉の無精髭が、頼に当たった。痛かった。

なおも梯吉が顔をすり寄せて来た。

その類に暖かな泪があつた。左知子も父の顔をまさぐつた。泪の暖かさに触れたら急に哀しくなつた。左知子の眼にも泪が溢れ出た。

その時、小さかつた頃の、両親との平和な一日のことを左知子は思い出した。

かつての日、喜多院の日溜りの一郭で、父に追い詰められた河童頭の左知子が泣きべそをかきそうになる。

在りし日のひとこまであつた。

父は左知子を安心させるために、にこつと笑い、それから高く左知子の体を抱え上げた。

嫌がつているのに頼を押しつけられ、髭の痛さに触れて左知子はとうとう泣き出す。

そばに母の芳枝がいて左知子を空に高く持ち上げた。左知子は母の胸ふところにと抱きとられる。ほーらほら、サツちゃんは母さんの子だもんね。むずかつていた女の子はもう泣き止む。いま泣いたカラスがもう笑つた……。

あれは父のことばだったのか、それとも母の口癖だったのか。左知子は、父に顔を押しつけたまま、ぽたぽたと大粒の泪を流した。

歯を喰いしぼり、泣くまいとする。

梯吉は声にはならない嗚咽にのどを震わす。

その顔の上に左知子の泪が振りかかった。しつかりと左知子は梯吉の体を包みとつてやる。抱き合っている男と女のように。

「あいつが、あいつが……」

梯吉は芳枝のことを言おうとしてことばを吞

む。声にはならなかった。

やさしく寝かせつけるつもりで、左知子はぴったりと右の頬を寄せ、指先で半白の髪に触れた。なお、しなだれかかるように体を寄せ、男と女の暖かな体温を分け合った。

ややあつて梯吉が、ぽつりと独り言のように眩やいた。

「なあ、左知子、こんな家あつてもなくとも同じようなもんだ。ほんと、いつそのこと燃しちまえばいいんだよ。なあ、そうだろう……」

「……………」

左知子は父の顔を見返す勇氣はなかった。

はつと胸を打たれた。

父から顔を離そうとした時、はじめて、はつかの匂いを嗅いだ。男たちが来るまで口中に父は、はつかの飴玉を含んでいたのだ。

もう、梯吉は何も言わなかった。

左知子は、ちゃんと梯吉を寝かせつけてから、その場を離れた。まだ午後の三時を回ったばかりの時間なのに、部屋の中が暗く思われた。早く父のそばを離れたかった。父の視線をやり背後に感じたのだった。

「……いつそのこと燃しちまえばいい……………」

そのことばに左知子は答えられずにいた。あまり上ったことはないのに二階部屋に行く。

一人になれそうな気がした。

母がいつもこの部屋にいた。

父が寝ついてから、母は二階部屋を自分の棲処（すみか）した。なにか、この部屋には脂粉の香がいまも籠っているように思われた。

鏡台の前に立つと、厚化粧の母の顔が写って、いそう、左知子はずっと鏡掛けの飾り布を外したことはなかった。

鏡台の抽出しが、なぜか少しだけ開いている。不自然であった。

が、この時はそれほど気には止めなかった。カーテンを開けると、薄ら陽がもれて来て、ささくれ立った畳の表が浮いて出た。

ぼんやり、表通りを見る。やはり、表の風景も夏とはほど遠いうらさびしいものに思えた。家々の低い軒と軒がひしめき合い、屋根の色は古い家ばかりのせいか、生気が感じられない。ただ視野の先の青桐の木が葉を一杯に広げているのが、夏らしい風景といえぽ、いえるような気もした。

父はわたしの、夜の行ないのことを知っているのだろうか？

脅迫文と父を結びつけることは出来なかったが、父の仕業だといえないことはなかった。

今だって暇にまかせて父は丹念に新聞を読んでいる。すでにいくつか左知子が放火した事件は地方版で報道されていた。

その新聞記事に梯吉が関心を持って不思議ではない。川越にも連続放火魔か。などと紙面も大きな見出しをつけていたから父が知らぬはずはなかった。

もし、左知子の夜間の外出と、報道記事を結び付ければわが娘を疑うことは充分に出来るのだった。

梯吉は左知子に注意を促すために「いいかげんにしろ」と、文字を列ねたのかも知れない。

左知子にはそれらしい答を引き出すことは出来なかったが、父の視線にのたれようのないものを感じているのは事実だった。一人で畳の上に乗って見たが、気持が落ち着かず、すぐに立上り、左知子はまた窓の外に眼をやった。

外の風景の一つ一つはこの時見えてはいなかった。

2

「左知子がこんな演奏会に興味があるとは知らなかったわ」

北川洋子と、戸室左知子はサンロードの並びにある瀟洒なカフェに入った。

「カフェ・セジュール」という名の喫茶店で、洋菓子もかなりのものと評判の店だった。

山岸拓郎たちの吹奏楽団の演奏会場には、左知子だけが行った。五百人ほど入る会場だったが客は関係者ばかりらしく、二、三十人いただけだった。団員の数も同じぐらいで、左知子は何だか気の毒な気がした。それでも、山岸拓郎がソロ部分を受持った『熱牛のパッション』という曲でのトランペット演奏は、エイトビートの刻みが巧みで左知子は魅せられた。

北川洋子は自分のことばかりを口にした。

二つ年上の会社の男と今、結婚話が出ているのだが、

「もう一つ喰い足りないのよね。でも体はあげちゃったし」

と、大いに悩んでるふうのことを言った。

「いいじゃない。結婚は人生の墓場ではなくて、女の死体の捨てどころだってジョークもあるのよ。ユダヤジョークだったかな。もうそろそろ、捨てるものは捨てて、禿鷹に死体つかれるって話も悪くないんじゃない」

「やーね、そんな話きくと絶望的ね」

「それで、ほら、山岸拓郎のお父さん、どうしてまた自殺なんかしちゃったの」

「はは、もしかしたら左知子、女探偵でもやってるのかもね」

「そんなんじゃないの、恋人になってあげようかと思ったりしてるもんだから」

「へえー、まあいいでしょう。よくは知らないんだけど、あの人の家が燃えた時にね、お父さんがさ、保険金目当に火をつけたんじゃないかって話があったわけ」

「それで、そのことを気にして」

「さあ、誰れが誰れだかわからなかったみたい。左知子が興味あるんだったらもつとよくこの話きいておけばよかった。それよりさ、あの山岸拓郎、この子がかなりなのよね」

「何、が？」

「まあ、一言でいえばいやらしいわけ」

「洋子と何かあったんだ」

「馬鹿ね。仮りにも弟の友達よ」

「ふんふん、性の目覚めに関係ありでしょ」

「そうなのよ。わたしね、夏のある日のこと」

「もったいぶらないですよ」

「はは、お風呂のぞかれちゃったのよね」

「パーフェクトにばっちり」

「まーさか、暑いから窓をさ、半分ほど開けておいたらさ、ひょいと顔が出てさ、それがあつという間のことだったから」

「それじゃあの子ってわからないじゃない」

「何となくよ。直感でやつう。弟のところに遊びに来た時もさ、その眼付きがいやらしいの。つまり痴漢的ふんいきが充分にあったわけ」

「そんなのよくある話じゃない」

「ところがさ、わたしばっちりし、お説教してやったの」

「なんて？」

「弟が階下に行っている時にね、弟の部屋に遊びに来ていたカレに、ヘンタイの男の子はね、そんなふうだと女の人を相手にした時にダメになるのよ。って忠告してやったのよ」

「それじゃ脅しじゃない。あなたカレの心に傷をつけたんだ」

「傷をつけたって、なにそれ？」

「いざという時に、そういうショッキングなことと言われるとボッキしなくなるのよ。あーあ、これは心因療法が必要だ」

「シンイン……」

「いいからいいから、洋子は罪を犯しただけよ。いや、ひどいことをしたのかな」

店内はヨーロッパの中世風のレイアウトで統一されていた。やや、暗いが、それなりの雰囲気があった。セジュールセジュールと言うのはフランス語で、城の意味だから、やや、貴族趣味を気取ったの調度品なども飾られていた洋子は脚を組んでいた。むちっとした太腿を、佐知子はさつきから目にしていた。

体付きはどこか美里と似ていた。この女の魅力で男を手に入れたのだろう。木椅子がぎしぎしと音を立てるのは、その分、洋子が豊かな肉体の持主だったからだ。

「ああ、カワイソ、カワイソ」

と、左知子はことさららしく、山岸拓郎の側に回り、弁護者の一人になった。

「だって、悪いのは向うよ」

「この世は悪い人ばかり、洋子みたいにわたし悪くない人よなんて言っている人が多すぎるのよね」

結局、左知子は洋子を怒らせてしまった。

「左知子、まるで人が変わったみたい」

「わたしってシンポしちゃったの」

それでまた洋子は余計に気を悪くした。

3

電話台帳を繰り、山岸の名を探し当てる。中原町には山岸姓は一軒しかなかった。

近くの公衆電話ボックスに行く。ダイヤルを回したがなかなか相手は出ない。執勘に掛け続けた。

やっと相手が受話器を外す。

「はい」とだけ答える。男の声だった。

「あの、わたしサトウと言いますが、拓郎さんおいでになりますか」

「はあ、ぼくですが」

「あの、今日の演奏会に行った者なんですけど、あなたのソロ部分とてもよかった。いっぺんに、ファンになっちゃった」

「でもぼく、そんな…」

「熱牛のパッション、あれアンデイ・ランデイのグレイテストヒットアルバムの中にある曲でしょ。

あなたのソロもすばらしいけど、わたしアンデイ・ランデイのCDも聴いてみたいと思って」

「そんなの、ぼくなんかと比べちゃあ」

「でも、当然のことトランペッターなら一度や二度は聴いたことがあるんでしょ」

「ぼく、CD持ってますから」

「よかった。ね、一枚二千八百円もするのよね、ぜひ一度聴かせてもらえませんか」

「いやー、その、何といえればいいかな」

「わたしがね、好きなのは、ベースとかギターでリズムを切り刻んで行くところ。闘牛とのクライマックス・シーン、あそこんこのトランペットの

ね、追奏のところが感激なのよ。ほら半拍、遅れて行くでしょう。あの呼吸が絶妙だと思うのよ。あなたのソロを聴いてね、ああ、ちゃんと追ってるって感心したのよ」

「はあ、そうですね」

何だか面倒臭そうな答えになった。

見知らぬ者なので警戒しているのかも知れない。

「あら、わたし山岸さんのファンなのに。それで一つていただきたいなあと思って」

「でも、ぼく困ります」

「前にも二度ほどお会いしたことがあるんです」

「サトウさんと？」

「ええ、サトウエツコ」

左知子は自分の名を偽った。

「ぼくは知らないなあ。いつですか」

「えーと、いつだったかな。四、五日前かしら。駅前の銀行へ責色のバイクに乗って」

「ああ、行ったけど、ぼく、あなたのことぜんぜん知らないんです」

その時、三分の通話時間が切れようとしていた。それを知らせるブザーが左知子の耳にも届いた。

「ごめんなさい。わたしんち電話ないもんだから」

山岸拓郎に自分の素姓を知られたくないので、それらしく工作した。

十円玉をさらに二つ受口に落した。

「電話じゃ話もできませんから一度会って頂けませんか。その、CD、わたし手にしてみたいんです」

「はあ」

「そんなにお時間はとらせませんか」

「いつですか」

「今からじゃだめですか」

「もう夜の八時ですよ。いいんですか」

「よかつたら山岸さんの家まで行きましようか？」



「いえ、わかりにくいところだから」

「わたし知ってますよ」

「知ってるって……どうしてですか？」

「ふふ、ヒミツ、ね、わたしと会ってみる価値あるでしょう」

「まあね」

いつの間にか山岸は左知子のペースにのせられていた。結局、八時過ぎの中途半端な時間なのに、川越市駅前の喫茶店で会う約束をした。

「ごちゃごちゃした街並で、指定した喫茶店もあり見てくれはよくなかった。」

いちばん奥の席に、山岸拓郎が坐っていた。

こちらを見たが、左知子が入って行った時、彼はすぐに視線を外らせた。

「見覚えがなかったからだ。」

度忘れしているだけでどこかで会った女だと彼は信じていたのだ。

それで、席の前に立ち、

「さっきはどうも」

と、ぴよこんと頭を下げた女を、彼は訝（いぶかし）げに見た。

「坐っていいですか」

「どうぞ」

まだ納得の行かぬ顔をしている。

「たぶん、あなたから見れば、わたしは初めてはすよ」

「サトウエツコさんって覚えのないものな」

「いいから、いいから、ゆっくりこのヒミツは解き明かしてあげる」

「いやにヒミツにこだわるんですね」

「だって、わたし、あなたのことかなり知ってるのよ」

山岸拓郎はますます怪訝（けげん）な面持ちに

なった。ちよつと用心深そうな顔付きにもなる。テーブルの上に置いてある、黒い背景に銀色のトランプペットが配されたCDジャケットには、ちらと、視線を投げただけだった。

隣席のアベックが席を立つ。

左知子は声をひそめてみせる。

「あなた、真面目に夜は受験勉強してる？」

「……」

「わたしね、真夜中の散歩するの好きなのよ。だから何もいなくて夜の街つてすてき」

「……そういう話、ぼくとは関係ないのに」

「あらそうかしら。あなたの家、お母さんだけなんでしょ、そのお母さんも夜はラブホテルにお勤めだし。あなた、夜は一人だから、何をしても誰れにもわからないん身分だもの」

「ぼくは、二浪の身だから、夜はちゃんと勉強していますよ」

「勉強しているほうがいまどきおかしいのよ。そう思わない？」

山岸は、落着かぬふうに、何度もコーヒークップを口に持って行ったが、そのうち、手を出さなくなった。

「だいじょうぶよ。わたし、あなたを捕まえに来たんじゃないんだから」

「……」

聞えるか聞えないかの小さな声で、左知子は囁いた。山岸の顔色が変わる。

「ね、ここは出ましようよ。実はね、わたしも放火犯人に間違われて困っているのよ」

「そんな話、どうしてぼくにするんですか？」

「話が込みいって来たわ。ともかくここは出ましようよ」やつと山岸は同意した。

細い眼の奥に怯えた光があった。

立上る時にテーブルの上のCDジャケットを忘れそうになった。駅前広場にベンチがあつた。

自転車置場の横である。いつも姿を見かけるあの嫌な老人、桑原源吉は夜なのでいなかつた。

山岸と並んでベンチに坐つた。

「わたしね、殺してやりたい人が五、六人はいるのよ」

「それじゃ殺（や）ればいいのに」

決然と山岸が言い放つたので、今度は左知子が驚ろかされた。

「馬鹿ね、焼死する人がいたらの話、捕まったら死刑になるわ」

「どうでもいいけど、ぼくにどんな用があるんですか？」

「あなたにわたし救けて欲しいの」

「救ける？このぼくが……」

「だから言ったでしょう。わたし放火犯人に間違われてるって」

「それがぼくと関係があるんですか」 「あなたがトランプを吹いている姿ってかなり 恰好いいわよ。どこから見ても、今時、珍らしい好青年、わたしのボーイフレンド役になつて欲しいのよ」

「それが、サトウさんを、救けることになるんですか」

「あのね、わたし、夜の散歩に出るものだから隣りの男に火付け犯人だと思われてるの。それで、この前、詰問された時にね、こっそり夜だけ、ボーイフレンドの所に通っているって言っちゃつたの。あなたの家、夜はお母さんいないんだから、一緒にいたつてことにしてもバレないでしょ。つまり、アリバイをわたし作つておきたいの」

「あの、ぼくがどんな男かっていうのを、あなたは知っているんですか？」

「あら、わたし、あなたのこと、かなり知っているって言ったでしょ」

「かなりって……」

「だから、ほら、今、川越の街では放火騒ぎで大変なのよ。わたしね、何度か、山岸拓郎の姿を火事現場の近くで見かけたのよ。あなたが火を付けたかどうかは知らないけど」

「……」

ベンチに坐った山岸は癖なのか、さつきから貧乏ゆすりを繰り返していた。時々、その動きが止まる。しきりに鼻の頭も撫でる。

「ね、ほんとにわたしあなたを捕まえようってんじゃないから安心して。もしかしたら、このわたしだって放火犯人かも知れないし」

「……そんな話、信じられないよ。きみはぼくを罠に掛けようとしているんだ。どうも変だよ。ぼくの家のこと、いろいろ調べてるんだから」

「わたしを信用してくれないの。それじゃ、今から二人とも放火犯人になるってのはどう？ね、二人でどこかに火を付けるのよ。そうすれば、わたしのこ」と信じられるでしょ」

「そんなのいいよ。なにを言ってるのかよくわからないもんな」

「ともかく、わたしについてらっしゃいよ。面白いことが起きるかもよ」

二人は歩きながらの会話だった。

駅前通りを抜け、線路道に沿って歩くうちに、県立女子高の運動場の際に出ていた。

何となく歩くうちにこの道筋になった。

あとしばらく歩けば、いつか左知子が火を付けたあの老人夫婦のバラック小屋があつた跡に出る。

戦果を誇る気持になり、そのまま、山岸をその場所まで伴なった。暗い路地であつた。

女子高の金網の高さだけが眼についた。

火を付けたあとには前に一度来た。自転車で通り過ぎる時に横眼でちらと見た。

「ほら、見つけた。これは、誰れかが火を付けたのよ」

バラック小屋は取片付けられていたが、焼け跡であることは歴然としていた。

この前見た時は半分焼けたバラック小屋の形骸が残されていた。誰かがそのあと、取壊したらしい。

三角地帯の隅っ処には、焼けた木片がまだ投げ出してあった。いつもバラック小屋の前庭に置かれていた鍋ややかん、それに火を焚いていたブリキ缶などはもうなかった。

老人夫婦はどこかに居を移したのだろう。

「ぼくが、ここに、火を付けたとも言いたいんですか？」

「ここは山岸君ではないの、それぐらいのことわたしは知っているわ」

名前を呼ばれた彼はあらためて、左知子の顔を見返した。どうしてそんなことを言うのだろうかといった顔になる。

「知ってる？老人夫婦がいてね、ともかく生きていてもいなくてもいいような暮らしをしていたのよ。まるでホームレスみたいで、そんなの許せる？」

「ここは前にも通ったことがあるよ」

「ね、もう一度火を付けてみようか。ほら、燃え残った木があんなにあるんだもの。勢いよく燃え上るんじゃないかしら」

「まだ十時になっていない時間だよ」

「心配しないで。火を付けるのはわたし、山岸君は見張っていてくれればいいのよ。わたしも放火犯人にこれでなれるわけでしょ？」

「ぼくは見ているだけだよ」

「いいの、人が来ないよう見張ってて」

左知子は、CDジャケットを包んでいたデパートの包装紙をくしゃくしゃに丸める。

三角地帯の向うは四メートル幅の道路になっている。人の歩いている姿はなかったが、時折り車が通り過ぎた。まわりに家はないから、火を付けるには安全地帯だったが、なにしろね夏の夜の十時、どこに人の眼があるかわからなかった。

左知子は、山岸の新しい面に接する。

緊張した表情になり、あたりに気を配った。その真面目ぶりはまさしく放火犯人のものだった。

全神経をそばだたせている時の彼は、背がしゃんと伸びていた。

「やるわよ」

左知子の声に、彼は小さく頷いた。

左知子は、乱雑に積まれた焼けた木片の下に丸めた紙を素早く押し込み、それからマッチで火を付けた。一度は消火ホースの水をかけられた木片だったが夏のことで、もう乾き切っていた。

「ここはだめだよ。向うの道路側に出たほうがいいよ」もう彼は参加者の一人になっていた。

草地在、倉庫の横にあつたのでそこから道路に出た。見渡せるぎりぎりの場所まで二人は後退する。

道路を渡った地点の街路樹のそばで二、三分火燃え上る様を眺めた。

それほど火は高くは燃え上らなかつた。

三十メートルほど離れていた。

焚火の火ぐらいにしか見えなかつた。

「あの程度じゃね。ばかみたい」

左知子は、山岸の表情を盗み見た。

小学校の物品倉庫が燃えた日の、この若者の奇妙な行為のことを思い出していた。

いまも、山岸拓郎は興奮の気持を押さえられない

のだろうかと、この男の昂まりのほどに、左知子は興味を寄せた。急に黙り込む。意味もなくしゃべっているのは左知子だけで、彼は憑かれた者の眼になり、心なしに早足になった。

「ね、明日の夜は、あたたの家に誘いに行くわ。夜よ。いい？」

「そんなの、困るよ。勉強だつてしなければならぬんだから」

「まだそんなこと言ってるの。明日は山岸拓郎について知っていることをみんな話してあげる。もしあなたにとって都合の悪いことなら、二人きりになるんだもの、あなた、わたしを殺すことだつて出来るのよ」

「……………」

もう二人は、火災現場を後にしていた。

「そう、警察になんか捕まっちゃつまらないわよ。その方法についても話合いましようよ。わたしに名案があるのよ」

「夜つて、何時頃のこと？」

「そうね、真夜中でなくちゃあ。そのほうが二人だけの世界つてことになるわ」

山岸は否応なく承諾させられていた。拒否出来ないよう左知は巧みに話を継いだ。

「これからの時間だつていいのに」

「それがだめなの。わたし下腹が痛くつて。これでもがまんして歩いているのよ」

六軒町に通じる辻に出た時、左知子は、「それじゃね。明日の夜よ」と、一方的に約束を取り付け、山岸と別れた。

下腹の痛さは生理の前兆のように思われた。

大体が不順で三カ月に一度ぐらいのことなのに、望みもしない女のつとめを強いられていた。

わたしは女なんかじゃないのに。一人で、そう

嘯（うそぶ）いた。

この日は火曜日であった。

左知子は、午後のひととき、新宿（あらじゆく）町の県立図書館に行く。山岸拓郎の一家のことを調べるのが目的であった。

日曜日に北川洋子から聞いた放火に関わる話の詳細が知りたかった。

一年前の地元新聞と中央紙の地方版のページを開いた。一年前だから八月のことかと思ったら七月に起きた事件だった。

#### 朝火事で二人焼死。

七月二十一日、午前三時二十分ごろ、川越市今福三の八、古山健治さん（三八）方から、出火、全焼した。未明で発見が遅かったことと、おりからのカラカラ天気で火の回りが早く、この火事で健治さんと内縁の妻小川弘子さん（二三）が火に包まれ焼死した。被害者宅は深夜まで酒をのんでいた様子で、丁度寝入ったところで火に気付かなかったものと思われる。失火の疑いもあるが出火場所が火の気のないところから、放火の線でも捜査を始めている。

中央紙の地方版にはかんたんな記述しかなかった。同じ日の地方紙を繰るともう少し詳しいことがわかった。焼死した古山健治という男は、東京・池袋界隈を根城とする暴力団組織の準幹部で、対抗組織と抗争関係にあったことから、報復放火の可能性もあること、また借家であったことから立退き問題で、地元の不動産会社との間でトラブルが生じてい



たことなどが記されていた。

北川洋子から一部だけ聞き出した話とも一致するところがあった。山岸家が住んでいた地番が合っていることと、それに、立退きに関するトラブル話が絡んでいる件（くだ）りに注目した。だが、左知子には、山岸喜代次が自殺した原因までは探りかねた。その後の新聞記事も追ってみたが、そのことには触れてはいなかった。

一旦、家に帰り、父親のために遅い昼食を作った。台所の窓から隣家の破れた板塀が見えた。

洗濯物が、板塀と向うの部屋との狭い地所の間干してあった。日中のことで、隣家の夫婦者はいないはずであった。白いステテコが、かすかに風に揺れていた。見覚えのある男の下着である。

梯吉は食事が終わったあと、脚がだるいから揉んでくれと言った。下半身には知覚力がないはずなのに、この頃よく足腰を揉まされる。つけっ放しのテレビは熟を持っていて、そのせいか六畳間は暑かった。あお向けのまま、梯吉は両膝を立てた。

ふくらはぎがだるいと訴えた。

左知子は梯吉に背を向けた恰好で、ふくらはぎを揉む。お互いに、この前の立退き話の時には心を分け合ったが、その後はまた元の二人に戻った。

「なあ、足腰立たんと言うのはこれは気持の問題もあるかも知れんな。男としての張り合いがな、まるでない。いまだき、老人ホームでもいい年して色恋沙汰だと言うぞ。この前、テレビ見てたら、七十一歳の婆さんを取り合って、七十五歳の爺さんが同室の爺さんに果物ナイフで刺されたんだと」

「ばかみたいな話よね」佐知子が相槌を打った。

「だけど、女の取り合いをするぐらいだから、きっとその連中、肌の色艶もいいんだろな。父さんはまだ五十六歳だ。治らんわけはない。あいつのこと

許せんが、芳枝が帰ってくる気なら、わしは許してやらんでもない。だいいち、女言うもんが近くにおらんと、この足腰はしやんとせんのとちがうか」

「そのうち何か言ってくるかも知れないけど、今はどこにいるのかわからないんだから。そんなこと言われても困るわ」

いつの間にか、父親の手が、左知子の腰に触れていた。触れているのか、いないのか、わからない程度の指の動きであった。

脚をマッサージするたびに気付いていたことだった。左知子は梯吉の気持を押しはかりかねた。

むしろ嫌らしさを感じ取った。

少しずつ許していたら癖になると思って、腰に回した梯吉の手を「これ、邪魔よ」と言い、退けた。

「あのな、この部屋は暑くてかなわん。それに暗くて気も滅入る。二階で寝起きしたいんだがどうだろう」

「そんなこと無理だわ。食事から、何から何まで、その度にわたしが二階に上ったり下りたりするの。

いちいちたいへんよ」

「ここじゃ、外も見れんしな」

小さな庭があつたが、すぐ向うが他家の板壁になつているので、部屋自体が暗かった。

風通しも悪い。並びの隣家は、平屋建てだから二階は風通しもよい。

「だめよ。そんなこと」きっぱりと言った。

もう、梯吉は何も言わなくなつた。十分ほどふくらはぎをマッサージする。

その療治を終えて立上ろうとしたら、「お前……」と、何やら言いかけ梯吉は、口を噤（つぐ）んだ。左知子は振り返った。一、二秒立止まつた。

梯吉は眼を閉じたままだった。

黙っているので隣室に抜けた。父の次のことばは

聞きたくなかった。意を決したような言い方に思えたので、左知子はこの時は逃げたのだった。

自転車に乗ってふらりと街に出た。

夕方の四時には、家庭教師の仕事があつたが、一時間ほど、中途半端な時間が出来た。

下腹の痛みの兆候は何ヵ月ぶりの生理かと思つたら違つていた。

昨日は天気が良かったのに夜半になって蒸し暑くなつた。空気はその分湿気を含んでいたのだった。

旧市街地の新富町の銀座通りに出たら、春先でもないのにひよこが売られていた。

穴の開いた紙箱の蓋が開けられ、まだ生れたばかりのひよこが百羽余りも、羽毛を寄せ合つていた。

ぴよぴよと幼ない声を出している。

小学生の女の子が四、五人、箱の前に坐り込んでいて眼を輝やかせていた。

一羽百円と書いたボール紙の札が立っている。

左知子も自転車を止めて、あかず眺めていた。

柔らかそうな羽毛に触れてみたいという誘惑心に駆られた。一羽を掌の中に包み取つてみる。

頬のところへ寄せた。

「百円で卵を生めば元がとれるぞ」

店番の六十がらみの男が一言つた。みんな雄なのに卵を生むはずはないわと、思ったが左知子は相手をやり込めるのは止めた。

和彦のために用意した、いつかの復讐劇、フェアイヤーゲームの時の、見事な結末のことをまた思い出していた。このひよこたちも、もう一度、同じことをやれば、同じように仲間の死に殉ずるのかしら？と、火に飛び込む時の、あの壮烈なシーンに左知子は思いを馳せた。

三羽ほど買って帰ろうかしらと心が動いた。

「おじさん、六時過ぎでもいる？」

左知子は訊いてみた。

家庭教師の仕事了から帰りに買おうと思つた。柔らかな羽の感触に、あたたかな性の感触、を楽しむことも出来ると思えた。

「ああ、七時過ぎまでいるさ。生き物だからな、売れるうちに売らないと」

「それじゃわたし、六時過ぎに寄りますから」「ああ、いいよ」

約束を取り付けてから左知子は、元来た道に戻つた。途中、公衆電話ボックスがあるのに気付き、左知子は足を止めた。

急にまた、和彦の声を聞いてみたくなつた。

マフラーのお好みの色を決めてもらおうと思つた。何度か電話を掛けたがその度に美里や、美里の母などが出るので、その都度、左知子は一言も発しないまま電話を切つた。

彼女自身はそのことは余りに掛けてはいなかつた。発信音がし、ややあつて電話は通じた。電話口に和彦が出た。

「わっ、和彦、わたし。あなたっていつも電話に出たがらないのね」

自分が無言の電話を掛けていることを、相手に知らせているようなものだった。

それで和彦は「もしもし」と言つたものの一瞬、声をのんだ。

「ね、マフラーの色、オレンジ色ってのはどう？茶色じゃ地味だし」

「それならぼくはいいって」

「なに言ってるの。ほんとうはね、もうオレンジ色の毛糸買っちゃつたんだあ」

「いまはまだ夏なのに」

「なによ。夏だから、毛糸は売っていないと思つて

いるの」

「いや、今、お客さんが来ていて忙しいんだ」

電話の向うから人の談笑する声が聞えていた。

「赤ちゃんはどう？」

「どうって」

「夜、泣かれるとあれうるさいのよね」

「……………」

「また黙ったあ、和彦が夜、眠れないんじゃカワイソーと思つたのよ」

「おれ、接待役だから、悪いけど電話切るよ。学校の連中が来ているんだ」

「あー、ちよつと待って……………」

ことばの途中で受話器を切られてしまった。

「ああ、こんなことだと思つた。自嘲の眩やきであつた。口惜しさを紛らすために、同じことばを何度も眩き続けた。顔は泣き出しそうになっているのに、ことばの調子だけは朗らかそうに装つた。

知らぬ間に、小仙波町の葉崎家の玄関前に立っていた。ぼんやりしていたものだから約束の時間に五分ほど遅れていた。

ブザーを押したら、樹里の代りに、この家の母親が顔を出した。

「戸室さん、ちよつと」

玄関脇の広い応接室に招じ入れられた。

金の背文字の蔵書や、大理石造りの時計、生体標本のつもりか、雉（きじ）や、アルマジロの剥製なども壁際の敷台の上に並べられている。

この室に招ばれる時はろくなことはなかった。

はじめから左知子は嫌な気がした

それでも、例によつてお盆の上に飲物がのせられ運ばれて来た。今日は冷たいカルピスだった。

構えたふうに樹里の母親は左知子の真向いのソファに坐つた。

「あのね、あの子の数学の成績、ほんとよくないのよね。それに、遊び癖もついたみたいで、何て言うのかしら、異性にも関心持ち始めて、こういうことじゃ、成績は落ちる一方よ。どうしてもあの子には医者の学校に入って貰わないと、なにしろ後継ぎでしよ」夏には珍しい着物姿で対されたので、貧相な身なりの左知子は少しひげめを感じた。

夏塩沢と呼ばれる着物で、生地 독특한の、しぼと、しやり感があり、涼しそうに見えた。藍小紺（あいこがすり）で絹地に露芝（つゆしば）の上品な模様が配されていた。

冷房がきいていて、半袖のＴシャツ姿の左知子はすぐに寒くなった。

「家庭教師の仕事もこれでなかなかね。うまく相性が合わないと。ね、それでね。実は戸室さんの後任の人、東大出のお嬢さんを紹介いただいたものだから」

「やっぱり女の人ですか？」

左知子は半分は覚悟していた。この室に入った時に覚悟は強いられていた。

「やっぱりって、どういうこと？」

途端に、樹里の母親は詰問調になった。不快そうに眉根に立て皺も寄せてみせた。

「樹里さんが家庭教師を変えてくれって言ったんですか？」

「そんなこと、あなたに関係のないことよ。それがどうしたって言うの？」

「だって、お母さんはご存知ないかも知れませんが、あの子、嫌らしいことをわたしにも要求するんですよ」

「なんです。それ？」

「ほら、わたしの前任者の女子大生、あの人からも聞いたんですけど、樹里さんが体にさわって来るの

で、それが嫌で、止めたって。お母さんご存知なかったんですか」

もう左知子流のものの言い方になっていた。どうせクビになるならと腹をくくった。

「あなた、それ口から出まかせのこと言ってるんじゃないでしょうね」

「だったらこの場に、樹里さんをお呼びになったらどうですか」

..

「それで、あなたに何をしたって言うんですか？」

「そんなことはずかしくて言えません」

「…：ともかく、戸室さんの教え方がよくないってのはたしかよ。ほとんどテキストブック前にすすんでいないもの。辞めていただきたいっていうのはそれが理由よ」

「でも、わたしも被害者なんです。さわらせないとぼくがクビにしちゃうって樹里さんは言ったんですから」

「まさか、あんな気の弱い子が…：なんだかあなたの話聞いていると、わたし脅かされているような気になるわ」

「いえ、こういうこと、わたしいかげんにしておきたくないんです」

「…：どうすればいいのかしら？」

「さあ、前の女子大生の人とも話合ってみます」

「ちよつと待ってよ。こういうこと、わたし一人で解決することでもないわ。お父さんとも相談してみないかね」

「わたしをクビにしたのは樹里さんでしょ。この前、わたし乳房をさわられたんです。それ以上のこと求められたから、はつきり断わったんです。もししたら、お前なんかもうクビだ。って、話が合います」

乳房に触れさせたし、自慰の行為も手伝ってやつ

た。これまでのことは何となく二人の合意で成り立っているような性のおあそびだった。

が、左知子は、この時、樹里少年を一人の暴漢に仕立て上げた。言うなれば、強姦未遂者であった。表沙汰にはならぬとも、これは葉崎家にとっては芳ばしい話ではなかった。桃色遊戯の一つには違いはない。しばらく母親は黙ったが、うろたえている様はありありと見えだ。

眼が吊り上り、口元も歪んで見えた。

「いいですか。嘘かほんとかわかりませんが、こんな話、他の人にはしないで下さい。貴女にとってもいい話じゃないんですから」

「わかりました。でも、こんなことでバイトやめさせられるなんて、わたしだって、生活設計もあるんですし」

「悪いようにはしないつもりよ。ともかく、よそへ行つてつまらないことは口にしないで下さい」

とうとう、眼の前のカルピスには手を付けなかった。すっかり氷片が溶けた白い飲物は無視された。コップのまわりだけが涼しそうな氷の汗を浮かべている。何だか、空模様が怪しくなっていた。この前は「傘を持って行きなさい」との母親はすすめたのに今日は何も言わなかった。

ズック靴を履き、玄関を出る。人を送ることばもなかった。眼の前の森だけが、夕景の昏さを取り込んでいる。

蝉の鳴き声も、どこかに消えていた。

もう直き八月という月も終る。

黒い雨雲がまたたく間に空を占めたらしく、急に夕暮れ時の昏さの中に左知子は投げ出されていた。ここへ来る前は舗道の一郭は夏の陽射しに載（き）り取られていたのだった。

喜多院の森が黒く沈んで見えたのもこの印象の違



いのせいだった。とても嫌な気分であった。

みんなが寄つてたかつて左知子をいじめようとしているのだった。樹里少年の、何でもないふうの日常の横暴ぶりに末恐ろしいものも感じた。

それを助長させた左知子自身の罪もあったが、こちらは生活がかかっているのだと左知子は自分に言い聞かせた。

また、しくしくと来る痛さが下腹部にある。

それで自転車はゆっくりと漕いだ。

ひよこを買って行く気だったのを思い出す。

雨が降ってきそうだと空を見上げたが、可愛いひよこに釣られて、回り道をした。ぽーち、ちーち、ちーこゝとか、今度も前と同じような名前をつけてやろうと考えた。

ひよこたちには、色々な名があつた。

道行く人が小走りに走っていた。

銀座通りの商店街に出たら、露店のあちこちで急仕舞いが始まっていた。

ぽつりと来た。ますます空は暗くなっている。

どうしても夕立ちが来そうな気配であつた。

あと百メートル、左知子はひよこ売りの男の立場（たちば）までの距離を計る。

ペダルを無理し強く漕いだ。

が、ぱらぱらと来たと思つたら、夕立の雨が一気に降り落ちて来た。慌てて、左知子も自転車を降り、軒端（のきは）に身を寄せた。

かなり激しく降った。またたく間に、白く乾いた路面が濡れて光る。雨足が白い飛沫（しぶき）をはね上げていた。

むしろ活気のある夕景だったが、左知子は一人立ちつくしていた。子供たちの騒ぐ声や、人の怒鳴り合う声なども聞えている。

ひよこのことが気になった。

この雨だとひよこたちはぐしよ濡れになってしまふと思った。二、三分もどしやぶりの雨が降ったあと、やつと、やつと小降りになった。

雨の切れ間と思われた。

左知子は、まだ雨が降っているのに、自転車に乗る。あと、七、八十メートル、ひよこ売りが店を閉めて去る前に、そこまで行ってみようと思った。

が、視野の先に入れた時、丁度、ひよこ売りの男も荷台にひよこの入った紙箱を乗せ、その場を去るところだった。

距離は三十メートルほども迫っていたが、男の乗った自転車は左知子から遠ざかるうとしていたので、あと一歩のところまで及ばかった。

「待って」と声を掛けようと思ったが、相手も先を急いでいると見え、見る間に、両者の間隔は開いた。夕立ちの雨が、左知子の楽しみを奪ったのだった。

5

その夜、左知子は山岸に電話を入れる。

自宅からではなく近くの公衆電話からであった。相手に、自宅からの電話でないことを知らせるためだった。時間はまだ九時過ぎであった。今度はすぐに相手が出た。が、声の主は山岸拓郎の母親であった。

「はい、山岸ですが」

で、左知子は受話器を置くべきかどうかを一瞬考えた。黙っていたら続いて、

「どちらさまですか？」

と訊かれたので左知子は自分の名を告げたが偽名であることをいつとき忘れた。

「あの、サチ、いえ、サトウ、エツコですが」  
あわてて自分の名を言い直した。

「サトウさん？」

「あの、タクロウさんおいでになりますか」

「ああ、ちよつと待って下さい」

少し待たされた。十円玉を追加する。

「もしもし」

不興気な声に聞えた。自分のほうからは一声も発しない用心深さが感じられた。

「あのね、場所を変更したの。わたしがね、火を付けた場所に案内してあげる。中原町の小学校の運動場、物品倉庫のあたりってのはどう？」

「……………」

「わかったあ、時間は午前一時よ。それじゃあね」

相手はうんともすんとも言わなかった。

言うだけ言って左知子のほうから切った。山岸拓郎から借りた『熱牛のパッション』がテープに録音してあった。カセットコーダーにセットし、トランペットのヒートウエーブの追い上げに部に耳を傾むけていた。

手に汗を握るクライマックスの場面である。畳に仰向けになり、天井を見ていた。あまり熱心には聴いていなかった。

変なことを考えていた。わたしお化粧でもしてあの男の子を驚ろかせてやろうかしら。そう考え付いたら、闘牛が血みどろになって倒れるクライマックスシーンなどどうでもよくなった。母の芳枝が失踪して以来、鏡台はそのままになっている。

たまにしか掃除しないので薄く埃をかぶっていた。抽出しに手を掛けようとした時、ふと、

この前見〇た時は少し抽出（ひきだ）しが開いていたということを思い出した。

いや、そのように記憶していた。

別段気に止めたものではなかったが、なぜだか、急に気遅れしていた。

あの時は、金融屋の男と不動産業の男が二人してやって来た時だった。その後のある日、父が「二階部屋で寝起きしたい」と言った。

左知子は一笑に付したが、そのことも何だか気掛りになった。抽出しを開けてみる。特に中のものの一つ一つを記憶しているわけではないから、左知子は何がどうとは言えなかったが、ともかく、母の化粧道具は乱雑な状態を呈していた。

左知子は、その中から口紅を取り出す。

キャップをとり、右にと回転軸を回す。取り残して行ったものなので三分の一もなかった。左知子はそのまま自分の唇に口紅を押しつけた。すつと塗り、指で紅を広げた。筆は使わなかった。リップステックをさらに唇に押し当て、今度は色濃く唇を形どった。

やつと母が好んで使った口紅の色を移しとっていた。やや紫色がかった色で、鮮やかというよりは濃厚な紅色であった。

小さな顔をした、眼の細い女が鏡には写っていて、唇を突き出している。嫌な表情であった。

唇だけが隈取りされているので毒々しくも見える。「あーあ、女の人の性器みたい」自分の唇の色を見て妙な感想を持った。

その部分だけが強調されているので、ぱくぱくと口を開いたり閉じたりしている自分の唇が、なにかを食べようとしているのがわかった。

つまりはこうやって、女性器は男の一物をくわ

え込むのだと左知子は鏡を前に演習を繰り返していたのであった。

「どんな女もこんなに毒々しいのだろうか。」

そう考えたのは、こうやって男を食べる女たちが許せなかったからである。

そのくせ、今夜はお化粧をして山岸拓郎を驚ろかせてやろうという考え方は変ってはいなかった。

ごちゃごちゃになっている化粧道具の中からアイシャドウを見つけ出し、これまた、あれこれ探ったあと、シャドウを引く小筆を探し当てた。瞼に描き取られたのは、濃いブルーであった。

細い眼なのに、唇に次いで、眼までもが水商売女のそれのようになった。

「なに、これ、わたしってお母さんと何もかもそっくりなのかしら……」そこには痩せたか細い感じの女の顔しか映ってはいないのに、左知子は「大人の女」になったような気になった。

まだ顔を彩るものがありそうな気がして、左知子は鏡台の抽出しをなおもごちゃごちゃと掻き回した。つげまつげがあった。

自分の瞼に当ててみた。余り可愛い女には見えなかった。それに片方しかなかったので、抽出しにもどす。

自分の坐っている鏡台用の坐り台は中が収納箱になっていた。腰掛けの蓋部分をとると中に女の小物類がこれまたごちゃごちゃと詰め込まれていた。ビニール製の小物バッグ、ドライヤーの壊れたもの、旅行用の小物セット、化粧品会社からもらった試供品などであった。

その中を選び分けて行くと、小箱が見付かった。避妊具であった。黒と金色でデザインされたいわくありげな小箱である。一ダース入りだったが、中を探ると、空だった。

。こんなもの使って、母は男たちを相手にしていたのだろうか。とまた、嫌な男や女の相姦図のことを考えた。

母の厚化粧のことを考えると脂粉の香が漂ってくるような気がした。実際にその残り香を嗅いでもいた。

使い古しのパフや、お白粉、乳液やクリームなどの容器も鏡台の上には置かれていた。

左知子は、その時、包装されたコンドームを、坐り台の箱の隅で見つけた。まだ二枚分残っていた。が、手にした時、そのうちの一枚が口が開けられているのに気付いた。

自分も開けてやろうと思ったからその手間が省けたようなものだったが、妙な物思いを持った。中ものを引き出すと、ちゃんと折りたたまれているはずなのに、誰れが開いたのか、中ものは伸びたままの形になっていた。

ぬめぬめしたゼリーが塗られていて袋状のものを手にするると、指先がべたべたした。

その指先に、細い横敏の部分が触れた。線状の凸凹部分に、左知子はこれまた嫌らしい作意を感じ取った。

こんな細工で快感を得ようなんて、人間て一体何を考えているのかしら？その軽蔑の思いは、母の芳枝にも向けられたことだった。

が、急に、封を切られた一枚のコンドームに、その時左知子は疑念を持った。

誰れが、こんな中途半端な形のままにうっちゃっておいたのだろうかというもの思いである。

母なのだろうか：この考えはすぐに捨てた。

梯吉のことが頭をもたげてきた。

この家に住んでいるのは今は二人だけである。自分に覚えがない以上、もし意識的な行為者

がいたとしたら、父以外にはないのであった。

それにしても、梯吉は足腰立たぬ人間である。二階にまで上って来ることは到底出来ないはずだった。左知子は一先ずのところ、父だという考えを打消したが、またぞろ、父だと考えを引き戻した。

二階で寝起きしたい、と言ったことにこだわりを持ったのだ。ほんとうに、住み心地が少しはよくなるからだけのことなのか。

その時、左知子は階下に、人の笑い立つ声を聞いた。隣家の女の声であった。

左知子が窓際に寄ると、眼の下に、そこだけ明るさを示した場所があった。そこは隣家の浴室であった。浴室の窓は開け放たれていて、眼下の痴態の様が見えた。

嫌らしい感じだけの毛だらけの脛と、白くつぶよぶよした女の尻の部分だけが絡み合っている。時折り、男と女が嬌声をあげる。

その声に左知子は窓辺にと引き寄せられたのだった。なにをしているのかまだわからない。

浴室の窓の上部にはトタン屋根の庇が突き出ており、男と女の裸身はその一部しか見えてはいなかった。笑い声が止んだと思ったら、男の腰らしいものの一部が動き出した。

その揺れは一つの規則性を持っていた。なんのことはない。

隣家の中年者の夫婦は風呂場で性の営みに夢中になっているのであった。毛脛部分と、腿から下の女の白い肉、載り取られた絡みの部分だったが、男の懸命ぶりだけはよくわかった。

左知子には何とも滑稽なものに思われた。

いや、怒りの気持も湧いていた。

別に左知子に見せるために意図されたもので

はなかったのだろうが、眼下の構図は、左知子に見せつけるためのことのようにも思われた。

左知子が自分の考えを捻じ曲げた。

そのくせ、いつまでも続く、その大らかな性の営みに左知子は視線を投げていた。

なにやら、性の営みには安息があるのか、二つの裸身が体を離れたあとは、湯音も和やかなものになった。あの、嬌声も聞えなくなり、代って隣家の男は下手な歌謡曲の一節を口ずさんだ。やがて、白光部分の明りが消され、その場所には暗さばかりをそこに残した。

左知子はその時、それを仕掛けた男より、その行為を甘んじて受けた女のほうが許せないと思った。なぜということはない。ただそう思っただけだった。

。そうそう、あの豚のように太った女の性器には黒い口紅でもべったり塗りつけてやればいい。黒い唇がぱくぱく動いているって結構さまになるわよ。そんなものを相手に夢中になっっている男なんてね……

左知子はまた自分だけのことばを眩やいた。

見世物に、嫌気がさし、窓辺を離れる。

もう、鏡は見なかった。

左知子は自分が、厚化粧を真似た女であることを忘れていた。

真夜中までの時間、繰り返しCDを聴いた。曲は一曲だけではない。ややラテン調の曲をジャズ風にアレンジしたもので、今聴いている曲は、トランペットはメロディアスな入り方をしていた。一時間ほど音楽を聞いていたが、もっと他にすべきことがあることに気付く。

左知子はこれからの自分の放火のベーパープ



ランを練ることにした。

その計画には山岸拓郎の協力も必要だった。

どうしても罰してやりたい人間が何人かいた。漠然とした殺意だった。その結果起り得ることについては余り考えていなかった。

田尻義和の家。

斉木和彦と美里の家。

葉崎樹里の家か、医院。

左知子をしつこく付け回した桑原源吉という老人。

いつもうるさく吠え声をあげるさわら垣の家。  
村井という名で町内会の役員。

あとは、無理矢理に、腹立たしい人物を書き列ねて行く。ひよこ売りの男や、この前会って話をしたばかりの北川洋子なども左知子の対象人物になった。

。なんで火を点けてりたい連中が、わたしの回りでは増えるんだらう。

気に入らない者の名を探りながら、左知子はそんな不遜な思いを持った。

そんなことをしているうちに、夜の十二時を過ぎた。出かけるので二階の明りを消そうと思つたが止めた。

隣家の男がもし、眼を瞞っているとしたら、これから出かけますと知らせるようなものだった。ペーパープランの紙片はズポンのポケットに入れた。

山岸拓郎に見せてやろうと考えていた。部屋を出る時に、ふと妙なことを思い付いた。

鏡台の抽出しは開け放たれたまま、坐り台の蓋も取り外されていた。左知子は、乱雑にはあつたが、少し鏡台の抽出しを整頓した。口紅を右端に置き、バフやお白粉を中央辺に置いて

おく。それから抽出しは一センチほど開ける。鉛筆で、抽出しの上部に印をつけた。

もし誰れかがこの鏡台の場所まで来て、中のものに関心を持ったのだとしたらその動向ぐらいは掴めると思った。

誰かまでは考えたくなかった。対象者は一人しかいないのに。

階下へと降り立つ。

相変らずテレビはつけっ放しになっていて、西部劇でもやっているのか、拳銃を連続的に打ち合う音が聞えていた。そーっと足音は忍ばせて降りたが、テレビの音に助けられたので、もし父が目覚めたとしても気付かれぬはずだった。

たぶん梯吉はもう寝入っているに違いない。つけっ放しになったテレビは今夜も父の子守唄代りになっているはずだった。

左知子は予め、半分ほど開けておいた玄関の扉の隙間から抜け出て、夜の街に一步を踏み出した。

三光町から中原町まで歩く。近頃は自転車を使わなくなっていた。

真夜中の街はどこか生臭い。街はもう寝静まろうとしているのだが、まだ夜空は街の明りを映し出している。むっとする夜気は、昼間の暑さをまだ残していたので、少し歩くともう汗ばんで来た。

ぴたりと風が止んでいて、その分、街は息を潜めている感じだった。時折り、狭い道をタクシーが突っ走って来た。それに酔っ払いが路地の角からひよっこり現われることもある。

完全に街は寝静まっていたわけではない。

民家だって、まだ明か明かと灯のともされて  
いる部屋がある。

大方は受験生たちなのかも知れなかった。

だが、なるべく、人の気配のあるところはよ

けて通った。暗さに顔を向けながら、およそ二十分余りも歩いた。約束した小学校の校庭は、放火騒ぎがあったせい表門にすっかり錠が降ろされていた。

周囲は一メートルほどの高さの金網になってゐる。金網に沿って歩くと、何か所か補修されたあとがあった。やはりあの事件があつて破れ穴は閉ざされたのだろう。

結局、畑地の草叢に出た。

その向うには、物品倉庫がある。

暗闇に立ち、じつくり観察した。夜目にも、はつきり、新たに打ちつけられた応急処置の木の板が見えた。

およそ三分の一程が新たに板を打ちつけられた部分であつた。金網を越えることは出来たが左知子は止めた。下腹に痛さと呼ぶことになる。それほど左知子は身軽ではなかつた。

それに、草叢からは、首を伸ばせば物品倉庫の場所は見えるから、山岸拓郎がこの場所に来れば視認出来るはずであつた。

草叢に踏み込んだ時、虫の声がぴたりと止んだ。が、しゃがみ込み、じつとしてみると、また、虫たちは恋の相手を誘ふことばを発し始めた。

もう、こおろぎやすずむし、くさひばりなどの秋虫が多かつた。ふりふりふり、りーんりーんと喧（やかまし）いことであつた。

時折りまつむしがちんちろりん、ちんちろりんと大饗（だいきょう）に鳴いてみせる。

虫たちだつて、恋の唄声を懸命に奏でているのだつた。

だが、十分待っても二十分待っても山岸拓郎は来なかつた。じつと草叢にたたずみ、左知子

は待った。暗闇の中に、アイシャドウと濃い口紅をひいた女がたたずんでいた。

いつまでも……。

時計を見たら午前一時をはるかに回っていた。左知子には見える話ではなかったが、もし誰れかが、草叢に身を潜めている左知子を視認していたとすれば、夜陰に紛れ出た狂女の一人と見誤ったかも知れなかった。

が、左知子の思いばかりはこの夜、冴え冴えとしたものになった。……山岸拓郎は左知子の素姓を知らない。住んでいる場所も知らないし、ほんとうに放火犯人の一人なのかどうかを完全に知ったわけでもない。

だとしたら――その時左知子の考えたことは、山岸がどこから自分の動きを見守っているのではないかということだった。

つまり、そのことは、相手につけられたら、三光町の家のことがわかってしまい自分の身分素姓も知られてしまうことになるのであった。

三十分過ぎても現われない。

左知子は彼を待つことを止めた。

あたりを用心深く窺い、草叢をそつと抜け出した。山岸のことが頭にあったものだから、道に出た時、三光町のほうには向わずに、この場所から四、五分の山岸拓郎の家にと歩をすすめた。いつか、放火犯の男の姿を見失った道筋である。だいいち、約束の時間を無視した男を罰してやる必要もあった。

それで、左知子は角を左に曲がり、住宅の入り組んだ一郭に入り込んだ。

まだ、山岸喜代次と死んだ父親の表札が掛かっている。拓郎は、離れにいるに違いなかった。だが明りは消えて真暗であった。

母屋のほうは玄関灯が一つ照らされているだけだった。左知子は離れの平屋建ての前に立ち、中の様子を窺った。

いるのかいないのか、扉のノブに手を掛け回してみたがロックされていた。

ノックしなくとも中にいるなら人が来た気配はわかるはずである。

しばらくその場に突っ立っていた。

左知子は庭を睨（ね）め回す。

薄明な月が中天にあったので青白い夜の光景を眼にした。母屋の近く、横手に犬小舎があった。尖った三角屋根はお手製の犬小舎と思われた。どこか遠くで犬の吠え声が出ている。その犬の声が次々と波動して、犬共がその声を次のテリトリイにと伝えて行く様子がわかった。

だが、左知子の眼にした犬小舎には主はいなかった。そう言えばどこか古びていたし、前にこのテリ トリイに忍び寄った時も犬に吠えられはしなかった。いるかないかわからない男を待っているよりも、その男に自分の存在を知らせてやることのほうが先だった。

ここに来たことを教えておく必要があった。

左知子は母屋のほうに歩き、犬小舎の前に立つ。やはり犬はいなくて、代りに犬小舎の中にはチリ紙交換に出すつもりか新聞の束が押し込んであった。

まるで火を付けてくれと言わんばかりの道具立てであった。左知子は、一旦、新聞の束を取り出し、結わえられた紙紐を解いた。

ばらばらにし、燃えやすいようにしておいてから、再び犬小舎の中に新聞紙を詰めた。

こうなると、左知子はもう夢中だった。

手際よく、マッチの火を投げ入れていた。

ゆつくりとではあつたが確実に火は伸び上り、乾いた犬小舎の天井板に燃え移ろうとしていた。

あのさわら垣の家の犬を焼殺する気にもなつた。あたりが明るくなり、左知子の半身が映し出された。眉墨と、赤い唇だけが顔の輪郭の中で浮き立ってみえた。

と、その時、左知子は誰れかに肩を叩かれた。足音忍ばせてのことだったので、左知子は不意を衝かれびくつと体を震わせた。後を振り向くとそこに山岸拓郎が立っていた。

「やってくれたね。ぼくが考えた通りだ」  
勝ち誇つたようなことを言った。

「やつと現場を押さえたのね。山崎拓郎さん、これで安心したあ？」

「まあね」  
「まあねって、これこそ放火じゃないの。まだ不満があるの？」

どンドン燃え盛って行く犬小舎を前に二人は自分たちだけの会話を交わしていた。

犬小舎は母屋の板壁とはやや離れた場所にあるので、母屋に火の移る心配はなかった。

「もうそろそろ、ぼくがさ、火事だって叫ぶから、いいアイデアだろ。これでぼくは少しは疑われなくてすむよ」

「わたしはどうなるの？」

「ぼくんとところに真夜中にデートに来たんだろ。」

逃げずにいたら」

「あんがい頭がいいのね」

「まあまあさ」

「もうそろそろいいんじゃない？」

「それじゃ、いっぱつやるか」

火に炙（あぶ）り出された山岸拓郎はかすかに笑っているように見えた。

「火事だあ！火事だあ！」

ちよつと迫力を欠いていたが、彼の声は寝静まった近隣の者を叩き起すには充分であった。

ぽっぽつと二階家の電灯がともり、大抵は二階の窓から声のした方角をたしかめる。それから一、二分、みんな寝巻姿のまま表に飛び出して来た。その前に、拓郎と左知子は懸命に火を消すふりをしてみせた。

二人が奮闘中のところに近隣の男たちが五、六人馳せ参じた。隣りの家の花壇用の水道の蛇口からホースが引かれ、勢いよく水がふりかかったら、すぐに犬小舎の火は鎮まった。

「これは放火だよ」

「火が消えたからいいけど、今後のこともあるからちゃんと消防署には届け出たほうがいいよ」

「ぶっそうな話だ」

「わたしが消防署には電話しておこう。明日の朝じゃあ現場がちゃんと保存されないうってこともあるからな」

男たちが口々に意見を述べ立てた。

「はあ、お願いします」

神妙に、拓郎は答えた。

それで、間もなく消防署の係官が車でやって来て、事情聴取され、被害届の用紙に拓郎はサインした。左知子は、この家のもののような顔をしてそばにいただけだった。ほんとうは彼に話すべきことがあった。これからのことについて。この騒ぎでその機会を失した。

暗かった空がだんだん白みを帯びて来て、東の空が藍白色に染まり始めた。

もう午前四時を少し回っていた。

放火の行為をしたことには変りはなかったが、何だか気持がすっきりしなかった。拓郎は気付いていたのか、いないのか、左知子が化粧していたことを何も口にしなかった。

左知子自身忘れていたことではあったが――。

家に帰ってからはじめて、唇の端に口紅の匂いを感じ取った。ティッシュペーパーで拭きとる。二階の部屋の屑籠に捨てる。ここでも左知子は少しだけ気になったことがあった。

屑籠に捨てようとした時、すでにその中には口紅のついたティッシュペーパーが捨てられていた。これは、化粧して、拓郎に会いに行く前に自分が口を拭ったのかどうか、左知子はどうしてもその一点が思い出せなかった。

だが、そのことが妙に気になった。

自分は、べったりとは口紅をつけなかったのに、すでに捨てられたティッシュペーパーには口紅のあとがかなり濃厚に残っていた。